

國學院大學学術情報リポジトリ

現代版「絵文字」とその機能

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾山, 慎, Oyama, Shin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000059

現代版「絵文字」とその機能

尾山 慎

はじめに—古代の「絵文字」とは

「絵文字」の辞書における記述はたとえば次のようなものである。

①記録や意思の伝達のために絵画を用いた文字の初期の形態。象形文字以前の段階のもの。ピクトグラフ。

②装飾文字の一つ。マーク、看板に使う花文字など。

(※傍線は引用者による—『日本国語大辞典』精選版)

世界に現存する文字は、元をたどればアルファベット系（ヒエログリフ）か漢字系（甲骨文字）のいずれかになるという。漢字の伝統的字源分類である「六書」では、「象形」という分類があり、甲骨文字⁽¹⁾やそれに次ぐ金文の研究によって、たとえば「王」字の第四画目は王の權威の象徴であった鉞をかたどったもの、といったことが分かっている。これは甲骨文字や金文という、現存資料で最初期に相当する漢字字体資料によって得られた知見だった。そして、研究によって最終画が鉞を象っていると分かったということは、すなわち鉞というには（甲骨文字といえども）幾分抽象化していて、一見してはそうと分からなかったことを示してもいよう。甲骨文字に次ぐ金文以降、ことに象形の方法で作られた字体が抽象化すればするほど、字源は辿りにくくなる。事実、「王」字の字源は別の解釈が長年主流だった⁽²⁾。

右図「王」字のように、あるものを「象った」文字が甲骨文字や金文に認められるのだから、資料的裏付けはないものの、これら以前に、たとえばもう少し鉞を鉞らしく描いた段階のものが存在していてもよい。それが、つまりは上掲の辞書記述がいうところの絵文字であろう。ただ、“鉞を（象形文字よりは）鉞らしく描いた段階のもの”を絵文字と呼ぶとしても、もちろんその「段階」とは仮説的な意味での「段階」であり、実際は連続的である。つまり、どこまで抽象化されれば象形文字で、どこまでより実



甲骨文字



金文

際の絵にちかければ絵文字といえるかは、現物があつたとしても判定は難しい。ちょうど、ある一つの字を行書から徐々に草書へ変化させて何十字、何百字と書き、その結果に対し、どこからが草書体かと判定することの難しさに似ている。よって、絵文字と象形文字は連続的であると認めつつ、仮設するものということになる。

さて、上掲の辞書記述でもう一点重要なのは「文字の初期の形態」とされている点である。これは前述の絵文字と象形文字の連続性を問う上でも関わってくることである。先に絵文字と象形文字は、それぞれ措定できるとしてもその間は現実には連続的变化であると述べたが、それはあくまで絵文字と象形文字が、同じ性質のものかどうかを一端不問にした上でのことであった。そして、まさにその点で先掲の辞書はすでに一つの答えを出している。それは「文字の初期」という言いである——つまりいずれも「文字」であるとしているのだ。この点には注目しなくてはならないし、かつまた改めて問い直されるべきことであろう。矢島文夫 [1976] は、「文字の一種としての絵文字の定義としては、記号が絵画的性質を持つもの（具象性の強いもの）」としている。これに先だって矢島は、文字とは「何らかの形で言語を反映するもの、つまり人間の言語活動と切り離せないもの」と定義しており、ゆえに、「氷河時代の洞窟絵画、インディアン^①の絵、沖縄の結縄、インカのキープ（彩色縄）など」はそもそも文字に入らず、かつ「交通標識や博覧会場などの各種表示は、幾分かは言語的表現と関係があるかもしれない」が、上記定義の絵文字には含めない、とする。これをまとめれば、絵画的性質が強く、具象性が強くとも、言語を反映するものは絵文字であり、すなわち文字の一種ということになる。漢字の場合、甲骨文字段階以前のものが、比較できる形では存在しないので、それらが言語をどれほど反映していたのかどうかの実際の判定は不可能であるが、言語を反映していたのならば、まさに象形文字へと連続するそれであったわけで、絵文字は確かに既に文字だった、といえよう。

さて、翻って、現代の携帯電話におけるメール（以下「携帯メール」もしくは「メール」と略称する）で用いられる「絵文字」はどうだろうか。この問題提起は、矢島前掲論が「交通標識や博覧会場などの各種表示」を絵文字の範疇から外したことに関わる問いである。矢島の処理は、古代と現代という甚だしい時代的懸隔による除外であるとは読めず、「幾分かは言語的表現と関係があるかもしれないが」とあるとおり、明確な言語の反映が見いだしがたいとの判断によると見られる。「交通標識や博覧会場などの各種表示」と携帯メールの絵文字との差異についても本稿では考察を加えるが、いずれにせよ現代の絵文字なるものが文字なのか否かは問い直す必要があると考えられる。換言すれば、それらが果たしてどれほど言

語を反映しているか、という問いである。古代の絵文字とは、前述した理解に沿えばすなわち文字の黎明といえる存在であったが、現代の絵文字とは、すでに言語を表す文字体系が存在している上で用いられるものである。ゆえに、「言語を反映している」かどうかという問いかけも、古代のそれとは意味が変わってくると考えられる。本稿では、現代において「絵文字」と呼ばれているものと、漢字をはじめとする文字との機能的差異について改めて考え、「絵文字」の内実と、存在意義を考察したい。

1, 文字と言語

言語学の入門で最初に教わることといえば、「言語とは記号である」ということだろう。文字はその言語を二次元上に記録する記号である。つまり、いうなれば記号の記号とでもいうべきものである。ソシュールが、文字は言語の召使いのようなものだと重視しなかったことは有名だが⁽³⁾、確かに文字の側からすれば、その存在の前提が言語との結びつきであるのは事実である。これは、世界中を見渡せば、話し言葉があって書き言葉が存在しない——つまり文字もない——という例は多々あるが、その逆はないことが示している⁽⁴⁾。原理的に、話し言葉が存在しないままに文字および書き言葉は誕生しえない。

さて、この「言語(言葉)——以下便宜上“言葉”に統一しておく」と結びついているというのが実は問題である。たとえば日本語では、「食」という文字は「たべる」「くう」「シヨク」などという言葉と結びついている、ということができる。また、音声としての /taberu/ を漢字表記しようとしたときに「食」字が書かれ、また「食」字をみると「たべる」という訓が脳裏に浮かぶ。このように読み書きの回路ができあがっていて、それが社会的に共有されているのだから、確かに、この文字は言葉と“結びついている”といえるだろう。一方で「𠮩」はどうだろうか。こういった視覚的の符号について様々な呼び方ができる(し、されている)が、とりあえず上記を始め、𠮩、𠮩、𠮩、𠮩などの類いを、「ピクトグラム」と呼んでおくことにする。そこでだが、𠮩は言葉と結びついているだろうか。ただちに特定の言葉を思い出すわけではないという点では、“結びつき”といってしまうには抵抗がある。しかしこのピクトグラムを見た時に、「食事、ランチ、ディナー、ご飯、洋食……」のように、いくつか言葉を思い出すことがあるのも事実だし、言葉を介さずに直接、“何かを飲食できる”ということイメージできることもまた、あり得る。あるいはその両方——いくつかの言葉とそこに映像的イメージを重ねて、ということもあるだろう。よって、言葉と結びついているか、といわれると、そうだとはいえる

し、また必ずしもそうでないこともある、といわざるをえない。ピクトグラムと、脳裏に想起されるモノとの関係性は曖昧模糊としている。沖森卓也〔2012〕は「視覚に訴えて個々人の連想に委ねるという点で、語を書き表すための文字とは異質」と指摘しており、そもそも先掲矢島〔1976〕が「交通標識や博覧会場などの各種表示」を文字から除外した理由もまさにここにあったと考えられる。

さて、『図解 日本の文字』（沖森卓也・笹原宏之・常盤智子・山本真吾 著 三省堂 2011）では、このようなピクトグラムについて、「概念との結びつきが直接的」と説明されているが、先述の通り概念とともにいくつかの言葉もまた脳裏に浮かぶこともあり得るという点も踏まえて、もう少し詳しく考えてみたい。言葉との結びつきが文字ほど密接、強固でないというのは、「幅があって許容性が高い」などという言い方もできるだろう。つまり、様々な言葉、様々なイメージが対応することを可能にする。「食べる」ことのみならず、「飲む」ことさえもこのピクトグラムは包括し得るだろうが、その許容性の高さは、たとえば外国語にも発揮される。このピクトグラムは食事時にナイフとフォークを使用することのある文化、およびその文化の存在を知るほとんどの人に理解されるだろう。そして言葉というならば、日本語、英語、中国語、韓国語、スペイン語、フランス語……いくらでも対応しうる——たとえば空港の国際線、たとえば万国博覧会やオリンピックの会場において㊦は様々な国境を越えた「言葉」と「イメージ」をそこに包括してしまうことだろう。

そこで以上をまとめると、

文字とは言語と密接に結びついているもの。対してピクトグラムはその対応が緩く、かつ許容性が高く、しかも言葉を介さずに直接イメージ、概念を喚起することもあるもの。

ということになるのか。しかし、この定義ではまだ多義の漢字との区別が分明ではないところがある。たとえば「下」という字には、

した しも さげる さがる ゲ カ

などがある。確かに複数の言葉と対応し、結びついており、このこともまた「許容性が高い」、「言葉との対応に幅がある」と言えてしまいそうである。文字とピクトグラムとの差異を明示する特徴はまだ他にあると考えなくてはならない。

2, 対応する言葉の単位

前掲沖森卓也[2012]が、「言語音に直接還元されないような、分節性を持たない表記単位は記号一般に類することになる」と述べている。本節ではこのことについて改めて考えてみよう。

㍷が喚起する、食事にまつわるイメージといってもかなり広汎で、漠然としている。先述の通り該当しそうな言葉がいくつも挙げられるという点に加えて、対応すると思われる言葉の単位が一定しない（していなくてもよい）という点も挙げられる。つまり、「食べる」「食事」「ご飯を食べる」「食事をする」……など、該当ワードの際限のなさもさることながら、名詞、動詞、あるいは文など、ある一定の言語単位に対応するとは限らず、多様という点である。他方、漢字の多訓はやはりそうではない。

強い風のためにドアが開く

は、「あく」と「ひらく」に対応していることになる。これはピクトグラム㍷が「食事」「食べる」「ご飯」……などに対応しているのと一緒ににはならない。文字の場合、言語単位として分節される一語に対応（時に複合語の場合もあるが）していることは普遍であり、あくまでその上で複数訓を擁することになっているだけで、ピクトグラムのように、対応する言葉の単位が一定しない（させる必要がない）という点が大きく異なる。このことがよく分かるように、このピクトグラムを文章内に配置してテストをかけてみよう。

- (1) 昨日、兄と食事をして、映画をみました。
- (2) 昨日、兄と㍷、映画をみました。
- (3) 昨日、兄と㍷て、映画をみました。
- (4) 昨日、兄と㍷して、映画をみました。

看板や、表示パネルに単独で示されるのではなく、このように文字列内に挿入されたものに対しては、読み手は映像的イメージだけではなく、言葉も表すものとして読もうとする可能性が高いと考えられる。というのは、(2)～(4)はピクトグラムを削除すると文章として不完全だからである。そして、(2)～(4)のうち、その「言葉」をもっとも絞り込めるのは明らかに(4)である。(4)は「して」とあることから、「食事」か「ランチ」あたりが妥当といったところだろう。兄とともにとった行動順序

もよくわかる。次に(3)は「て」が送られていることから、映画の前に食事をとったという順序は分かる。ただし、該当しうる「言葉」は(4)より多くなり、「食べ」「食事し」「ランチし」などがあげられよう。そして(2)であるが、該当する「言葉」はさらに増える。しかも映画をみたこととの前後関係も判然としなくなる。可能性は低いかもしれないが「食事をしながら」「食事をしつつ」ということも考えられ、(3)(4)に比べてある意味で“可読性”は落ちる。このように、(4)のごとく、あたかも文字のように扱って、送り仮名などをそれらしく続けてあれば、それなりに文字に近い役割を与えることができるようである。(2)～(4)を比べて分かるように、送り仮名や付属語の有無だけで、㍶から読み取ることができる言葉は可変的なものとなっている。(2)「食事して」→(3)「食事し」→(4)「食事」。この(2)～(4)の可変性はつまり、ピクトグラムがたと言言葉を想起させるとしても、それ自身は、対応する言葉が一定の単位でなければならないといった制限を持っていないことを如実に示している。(4)のように、擬似的な分節を与えて、いわばロックをかけてやると、文字に相当するような役割を果たすことは可能だが、(2)、(3)——ことに(2)のように、そのロックを緩めるととたんに、制限が緩み、対応する言葉の単位が一定しない状態に戻っていつてしまう。そして、文字列という枠内から外れると、必ずしも言葉を示すとは限らない、視覚的イメージを強調する、いわゆるピクトグラムとしての役割に戻るのである⁽⁵⁾。言い換えれば、ピクトグラムは、文字列中にあることで「絵文字」となるのではないか。このことは4節で再び触れる。以下、メール文例中の㍶のごときものは、絵文字と呼ぶことにする（そして、ここに古代の「絵文字」は含まない）。

3、絵文字と顔文字

現代の絵文字に類似する存在として顔文字がある。これは主にPCのキーボード上にある記号を組み合わせで作った「(∩O∩)」のようなもので、パソコン通信なるものの黎明期に生み出された。無論、携帯メールなどの絵文字に先行するという（堀田稗〔2002〕など指摘多数）。単純にタームとしてだけ聞くと顔文字は絵文字に包摂されるようだが、視覚的な表示形式が全く違うのと、当然ながら前者は「顔」——表情およびそれに付随する手足の動き等に限定されるので、これらは使い分けられるのが穏当であろう（インターネット上には「絵文字サイト」と称して顔文字のバリエーションを提供しているものもあるが、そのことは今は措く）。ところで、先ほどからあげている㍶は、携帯メールでもごく基本的なものとして打ち出すことができるものである。その使い方は無論様々であるが、先にも見たような、

(4) 昨日、兄と㊦して、映画をみました。

という使い方の他、

(5) 今日の晩ご飯㊦たのしみです。

(6) 昨日いったレストラン㊦かなりおいしかったよ。

などがある。後に詳述するが、後二者(5)(6)の使い方は、余剩的、補助的なものと考えられ、特に言葉は表していないとみるのが妥当だろう。絵文字を除去しても文章は完結しているからである。

一方の顔文字であるが、これらが何を表し、あるいは文字列上にあって何を補っているのかについてはすでに様々な指摘があり、概していえば、文字だけのメールではなかなか表すことができない非言語、副言語（パラ言語）を補完するというものである。その指摘は枚挙に暇がないが、たとえば「感情や状況を表面的に表現できる」（上北恭史 [2002]）、「コミュニケーションにおける細かいひだの部分表現」（稲増龍夫 [2008]）、「感情や印象の補助」（安原絵理子他 [2009]）など、かかる言説は顔文字を扱った論文中でまみ見いだされ、いまや周知といってよからう。なお非言語、副言語の補完という観点から顔文字の機能を明快に解説したものとしては『私たちの日本語』（定延利之編著 朝倉書店 2012 93p-）があるので詳細はそちらに譲る。周知のように言語、副言語、非言語のこの三要素がそろうのは基本的に対面による会話においてであり、たとえば電話だと相手が見えないため「非言語」は読み取ることができない。まして書き言葉となると、非言語はもちろん、音声的な「副言語」も捨象されるわけで、文字の色を変えたり、大きくしたりということはできても、話し言葉における情報としての「副言語」に質・量ともになかなか及ばない。この点、顔文字はその副言語、非言語に相当する要素を補う役目をもっているとされる、というわけである。

(7) すみませんでした

(8) すみませんでした (^O^)

(9) すみませんでした m(_ _)m

(10) すみませんでした (-_-;)

(7)~(10)の「すみませんでした」の違いは、顔文字の違いが支えている。(8)は一見文

脈と付合しないように思えるが、対面による口頭の会話で、笑顔を伴う「すみませんでした」はしばしばあることだろう。そういった対面での口頭会話の雰囲気演出するという顔文字の機能は確かに認めることができる。一方の絵文字であるが、絵文字には顔・表情にかかわるもの以外も無論多数あり、むしろその方が多いとみられる——上北〔2002〕は絵文字に大きくわけて「感情表現系」と「アイテム系」があるという——ために、三宅和子〔2012〕が「絵文字全体の使われ方からみると、果たしてそれ（非言語、パラ言語の補完—引用者注）が主要な役割になっているだろうか」と疑問視するのも、「アイテム系」の豊富さのために、相対的に感情的な側面の補完がさほど絵文字の主用機能とはみられないという実態になるのだろう。たとえば先の例でいうならば、「今日の晩ご飯🍱たのしみです」や「昨日いったレストラン🍽」における絵文字の役割は、明らかに上掲(7)~(10)の顔文字の果たす機能とは異なる。そして顔文字の方も、

(4) 昨日、兄と👨🏻して、映画をみました。

のように、👨🏻が「食事」、「ランチ」といった言葉に置き換わりうるものとして使われるようなことは少ないようである。安原孝一〔2004〕は、「話し言葉との対応を著しく欠いている」として、顔文字を文字と呼ぶには心許ないと指摘しているが、たしかに、

(11) 今日はうちの子も(^O^)です。

は、(^O^)がなんらかの言葉を負っていると見ない限り文章が完成しないが、しかし、それを確定するのは難しい。対して絵文字が例文(4)のように、言葉と対応する（同定が可能）場合もあるのは、やはり顔や感情に関わること以外のモノ・コトを表す“字種”が存在するからであろう。ちなみに、絵文字の方の、感情表現系としては、汗をあらわす「💦」「💧」、怒りの「😡」、ハート「❤️」や音符「🎵」などが基本的なところで、顔文字と同じく、副言語・非言語補完機能をやはり持っているといえる（無論、これら例示したものに限らず、その前提としてこれら絵文字が一定の概念を表すという書き手と読み手の相互諒解が必要であり、さらにさかのばればピクトグラムと概念の結びつきが達成されていなくては、成立しない）。

4. 絵文字の機能分類

前章でみた顔文字は安原[2004]がいうとおり、言葉と対応しているとはいいがたいものである⁽⁶⁾。一方で、副言語・非言語を補完するというのも、つまりは言語に付随する情報であるから、言葉を表す文字に付随してそれを表すとみるのは首肯できる。これに対し、

(5) 今日の晩ご飯🍚たのしみです。

(6) 昨日いったレストラン🍴かなりイケてた。

などは絵文字を抜いても文章はそれ自身で完結しており、かつ、副言語、非言語補完ともいいたいであろう。言葉との対応はなく(ゆえに副言語、非言語とも関連しない)、ほとんど挿絵に近いようなものであることから、これを本論では挿絵機能と称する。なお、上記(5)(6)の例で示したものの以上に本文と関係しない絵文字の使い方、たとえば「明日は試合がんばります♣️」だとか「じゃあまたあとで★」のごときものも、やはり挿絵機能に属すとみてよい(句読点がわりにもなっている)。挿絵の内実は多様であり、かつ後にみるように、感情を表すものと連続的なところがあるし、また意味と対応しているような場合にも、連続している(上記レストランの例は、本文の意味との一応の関連性をもつ挿絵、クローバーや星の例は関連性をもたないもの、ということになる)。たとえば笹原宏之[2001]は、絵文字の使い方として「語を表記」、「意味と対応」「語と意味に非対応」という三分類を設けている(21p)が、このうち、「意味と対応」の分類に、「【車】横浜まで行ってきたよー!!」(【車】は車の絵文字—笹原論文では実際の絵文字が示されているが、論者はいま引用にあたって便宜的にこのように表す)があげられている。この文の書き手は、絵文字をいれることで、横浜まで車で行ったことを「車で」と言葉にせずともわかると説明したという。このことを考え合わせると、意味を補足する挿絵ということもいえよう(実際、一般的な意味での本の「挿絵」にはそういうことが期待されるところもある)。なお、読み手によっては、「車で」

表3 絵文字の役割・機能

役割・機能	例
①事物そのものを表す	そっちは🏠何時まで?
②事物/事象の表現に前置き/後置き	🍷飲み会、どうだった? 4月からカフェ☕のウエイトレスとして働きます
③身体動作	じゃ、入り口のとこってことで👉
④プロソディー	あ、なんだ、まだ先かあ……
⑤前接文に合わせた感情を示す	かわいそうに……🥺 ありがとう🙏
⑥前接文とは異なる感情を示す	よかったね👏 それじゃあいまから寝るね😴
⑦装飾・雰囲気、リズムとり、句読点、トピック転換	いいなあ🌸 ところで👉あしたの放課後ヒマ～? 結構書き込みしてあるよ👉お仕事どう?

三宅[2012]より引用

という語と対応を見る者もいれば、そういった対応を認識せず、挿絵とみる者もいよう。後にも述べるが、本稿は、語と対応していると確定できる場合をそうと認めたい。つまり、その絵文字を抜くと文章が完結しない、という場合である。この場合は車の絵文字を抜いても文章が完結しているので、「昨日、兄と㊦して、映画をみました」の例とは一緒にならない。

さて、前掲三宅〔2012〕は絵文字の使われ方の類型を表のように整理している。①は三宅によれば「事物そのものを指すアイコン的役割」であり、「絵文字といえはこの役割が思い起こされがちだが、絵文字全体の中でこれに該当するものはわずか数%しかない」という。なお、この①の例にあがっている絵文字を「学校」に置き換え、「そっちは学校何時まで？」と解釈できるとしているが、別の可能性もなくはない。たとえば相手が学校にいることは既知で、「学校にいる相手」を指して「そっち」と呼び、「そっちは何時まで？」という文章をつくったとも考えられる。つまり①に例示されている絵文字は、「(学校にいる) そっち」に対する挿絵のようなもの——②に近いような解釈も可能である⁽⁷⁾。よって先にも強調したように、

(4) 昨日、兄と㊦して、映画をみました。

のように、かならず何らかの言葉に置き換えないと文章が完結しない場合を補足しておきたい。そしてこれを、「疑似文字機能」と称しておく。

三宅〔2012〕によれば、絵文字使用の実態としては表の⑤～⑦が多いという。⑤⑥は前章顔文字の項でみた副言語・非言語補完機能に相当しよう。④のプロソディは話し言葉における副言語に相当するのでやはり副言語・非言語補完機能に含まれる。⑦は、「絵文字と前接する文との関連性はほとんどなく、関連づけることさえ求められていない」「気持ちの確固たる伝達を意図して使われているのではなく、アクセサリーであったり、色目であったり」としている。これは挿絵機能の一種とみて差し支えないだろう。挿絵とはもちろん基本的には文章内容に関わるものが添えられることを指すが、それ以外にも、たとえばエッセイ、コラム等での末尾の空きスペースなどに、必ずしも本文と関係しない草花等のイラストが入ることがあり、それらもやはり挿絵と呼ぶことがあるだろう。つまりその範疇は広く、ちょうどここで取り上げられている特徴にも合致するものと考えられる。③の身体動作は、話し言葉であれば非言語に相当するが、挿絵に近いといえるかもしれない。このあたりは連続的である。

さて、三宅〔2012〕の分類①、論者のいう「疑似文字機能」の場合以外は、絵文字の大半は言葉との対応という役目を事実上負わないが、しかし文字列上にあって

こそ、「絵文字」と呼ばれる存在であることも事実であろう。これは、以下の二つの図をみるとよくわかる。



PCにおける文書作成画面の上記のイラストはアイコンなどと呼ばれ、絵文字とは通常呼ばれないだろう。しかし、

(12) 店の情報、プリントアウト  といったよ。

では絵文字と言われるのではないか。本稿で一貫して例に用いてきた  も、右図の道路標識のような場合、きっとこれを絵文字とは言わないだろう。絵文字、顔文字というのは、どこにおいて使われるかということと与えられるタームととらえるのが穏当である。「絵文字」という以上、文字の一種と無条件に扱ってしまいがちだが、ピクトグラムが文字列に交じったときの呼称であるとみるべきではないだろうか⁽⁸⁾。



なお、   とだけ打ち込まれているような、判じ物のごときケースもある。「ご飯おいしかった」とか「満腹で幸せ」とか書き手（打ち込み手）は一定の文章を思い浮かべつついれても、ほとんど読者にはその文章を復元し得ない。しかしこれらも、厳密には文字列上にないのに絵文字と呼ばれるだろう。笹原 [2004] がすでに指摘するように、携帯メールの絵文字には「発音を後回しにして用いた表意的表現や、読み方は相手に委ねるという用法」(2p) が早くからある（笹原論文の指摘は本稿より10年以上前に調査された結果に基づく）。何か正確に言葉を読み取って欲しいわけではないが、しかし、線条的に並べていることが、文字のように読んで欲しいことの表れでもあるし、文字を省いたところに、感情の伝達を優先したいのだともいえる。こういった例は疑似文字機能と副言語・非言語補完機能の両方に渡るような表示形式であろう。いずれにせよ、絵文字の機能を負ってはいらないうわけで、PC文書作成画面にいくつも並ぶアイコンの列や、高速道路の標示に並ぶものとは区別される。

以上みてきたように、ある概念や事物をシンボリックにあらわすピクトグラムが文字列上、あるいはそれに擬して並べられたとき、

- ・ 擬似的文字の役割
- ・ 挿絵の役割（内容にかかわるものから、無関係でほとんど句読点がわりというもののまで）

・副言語・非言語を補完する役割

を負い、文字に近いのは一番目だけだが、しかし三者のどの機能を負っている場合であっても一括してこれを「絵文字」と呼んでいる、ということになる。また副言語・非言語を補完する役割にほとんどが偏るものとして顔文字を定位することができる。なお、先にこれら三つの機能が相互に連続的な面をもっていると述べたが、たとえば次のような例を挙げることができる。

(13) 天気が悪いから☹️気をつけてね

(14) こっちはすごく🔊が鳴ってます

(15) あんまりいらんこと言わないでよ🔊

(13)は挿絵機能、(14)は疑似文字機能、(15)は、挿絵機能といってもいいが、本文との関連性をもたせれば雷を落とす、怒りを表す副言語・非言語補完機能といえるかもしれない。いずれにせよ、同じ絵文字が、文章の内容とそして読み手の解釈によってかように変わりうることを示している。

おわりにかえて

冒頭の話に立ち返りつつ、本稿の結びとしたい。既述のように現存の世界の文字はいずれも象形文字という段階を有す。その後のそれぞれの文字の歩んだ道とは、字体の変化の歴史でもあったわけだが、ことに象形によって造字されたものはその抽象化が進んでいくという道筋でもあった。象形文字の時代から今に途切れることなく続いているのはもはや漢字だけであり、その漢字は表音文字として留まったが、ついにその意味を捨てればアルファベットのような表音文字体系となる。平仮名や片仮名とは、元々の使用言語（中国語）を離れ、日本で字体をかえて到達した、表音文字化した漢字の姿である。

モノ・コトを絵にし、言葉と対応すればそれは絵文字であり（先掲矢島 [1976]）、以降、それが抽象化され、言葉との対応が強固になるほどにそれは正真正銘の文字になっていく。以上のようなことからすれば、現在の絵文字、顔文字が将来的に文字とどういう関係になるかと考えたとき、少なくとも「文字化」はしないということが次の二点の理由から確信されよう。まず一点目は、絵文字、顔文字が手書きではない世界でこそ、さかんにつかわれる——つまり万人が「まったく同じ字体」をいくらでも何度でも「書ける」という電子機器類上の世界に主としてあるというこ

と。換言すればこれらが手書きの中で現れにくいということが挙げられる。このために、今後、漢字や仮名の字体に同化する方向で抽象化、簡略化されるとは考えにくいのである。もしも手書き文化だけに存在するものであれば、自ずと簡略化を指向する可能性はあったかもしれない。たとえば古代になかった事物が絵文字で手書きされ、そしてそれまでの文字がたどった道と同様、簡略化、抽象化されればいずれ文字になったかもしれない。現実には、手書きによる絵文字というのは短いメモ、手紙等にあらわれる程度で、むしろこれからは機器類の機能向上も相まって、ますます具象的描写が指向されるかと思う。それはつまり、挿絵機能としてのリアルさの向上であり、また、副言語・非言語補完機能の、より厳密なリアルさの充実である。このことにかかわって清水由美子〔2008〕に興味深い指摘がある。それは同じモノを象った絵文字（たとえば飛行機）の、写生度の差があるものを比べる—よりリアルなものと、それよりは簡略化、デフォルメされたものとを比較した場合、後者の方が、許容できる意味範囲が広いのだという。つまり、リアルな方が「飛行機」を指すにはもちろん高い機能を示すわけだが、デフォルメされた方は、飛行機を指すという点ではリアル絵文字に劣るものの、その分「飛行場」など関連事項をも表すということが許容されやすいという。このことは、昨今の携帯電話各社の絵文字の種類増加にも関わっているものと思われる。携帯電話の画面がカラーになりはじめた21世紀初頭頃は、笑顔や泣き顔、怒り顔の静止画が主体であったのが、今や「大笑いしすぎて涙を流す」「驚いて口をぽかんとあげた挙げ句青ざめる」といった複雑に動く物（アニメーション）へと急速にパリエーションを増やしつつ進化を続けている⁽⁹⁾。しかし、清水〔2008〕が指摘するように、リアル度を上げると、指し示すものが限定的になる。ゆえに、表しきれないものを補完すべく絵文字の種類充実・増加が要求されるというわけである。つまり、記号としての抽象性を失っていく方向—「脱記号化」であり、「絵画化（写生化）」が進んでいるのが現状の絵文字ではないかと思う。一方、顔文字は「()」「/」「_」などの記号を組み合わせて作るものなので、絵文字のようなリアルさの向上とは次元を異にするが、やはりその種類は増殖の一途をたどっているようである。たとえばフリーで顔文字を提供するサイト「顔文字屋」(<http://kaomojiya.com/>)では、「2014年6月23日現在 6246個」と示されており、そのべ種類数にも驚愕するが、カウンタの存在が、日に日に種類が増えていっていることを示す。また顔文字の場合、性別はあまりないが⁽¹⁰⁾、絵文字の方で、性別あるいは老若ごとで“字種”が用意されている場合、たとえば男性老人をかたどった絵文字を若い女性が自身を表すものとして使うことは普通考えにくい。絵文字のリアルさが使い道を少なくし、そのことが、絵文字種の充実を促す。こういった潮流は、かつて文字が古代絵文字

から抽象化し、その姿を洗練していったこと、そして一つの字がいくつもの意義を背負って多義字になっていくという道筋とまさに正反対ではないか。いうなれば、絵文字はより、リアルな絵文字で、できるだけシンプルにモノ・コトを示すものであろうとし、その分種類を増殖するのである。これは次の、絵文字が文字化することはない第二の理由に関連していることでもある。第二の理由とは、文字体系がすでに存在しているということである。これもまた、いうまでもない当たり前のことだが、現代の絵文字が、古代文明における文字と古代絵文字との関係に比して決定的に違うところは、既存の文字の存在である。日本語であれば、漢字・平仮名・片仮名等の存在がそうである。現代の絵文字は最初から補助的、疑似的存在として生まれているのであって、無文字社会に降り立ったものではない。このことも現代の絵文字が、文字のエリアのほうへと進化することを妨げる要因であるだろう。先に述べたように、あくまで絵文字の枠内での洗練化、リアルさが追求されているのであって、自身を抽象化、ディフォルメ、そして簡素化して、文字に化ける、あるいは文字に擬態しようとする指向性は見いだしがたい。先述の通り確かに種類は増えるであろう。顔文字にしても、様々な表情が工夫され続け、“字種”数カウンタは増えつつづけることだろう。しかし、それはどこまでいってもバリエーションの増加であって、甲骨文字が金文になり、金文が篆書になったような意味での変化ではないわけである。

絵文字は、既存の文字と同化しようとするのではなく、ますます文字と差別化を図りながら、しかし共存しようとする存在になるだろう。ただし、おそらくこれからも絵文字・顔文字がなじまない位相（公文書、新聞等の公共性のあるもの、試験、論文、レポートなど学術性が要求される物、読み手と書き手の親疎関係、あるいは社会的立場における懸隔が大きい場合など）はあり、かつそこに、絵文字を出入力できる機器環境の制約が働くわけだから、絵文字とは、人間の書記活動という大枠の中では、常に二段階のブロックが働いていることになる。そういう意味でおそらくは、使用環境、位相は限られたまま、その中で、進化と深下を続けるのだろうと予想される。

註

- (1) 漢字造字法の分類としての「象形」と、初期の文字としての分類である「象形文字」と、さらには漢字の祖型とされる「甲骨文字」をここで挙げたが、造字法分類用語の「象形」は字体には関係しないので措くとして、甲骨文字のうち、象形の造字法によった字については象形文字とも呼ぶことにする（よって甲骨文字には象形文字の一種が含まれるが、甲骨文字＝象形文字ではない）。
- (2) 「王」字は天地人を一つに貫くものという「会意」的解釈がなされていたが、甲骨文字や金

文によって「象形」によるということがわかった(阿辻哲次『漢字道楽』講談社学術文庫2008 pp123-124および『漢字学『説文解字』の世界』東海大学出版会1985 p153およびp172注)。篆書以降の字体で字源解釈をした『説文解字』に示される理解のいくつかは、甲骨文字、金文の発見によって修正、訂正がなされている。

- (3) 「言語と文字表記は二つの異なる記号システムで、後者は、前者を表現するためだけにあります。それぞれのお互いにおける価値は、誤解の余地のないように思われます。一方は他方の召使いあるいはイメージ [image] にすぎません。」(F. ソシュール『ソシュール一般言語学講義 コンスタンタンのノート』影浦峽・田中久美子訳 東京大学出版会 2007 p55)
- (4) 音声言語が死語となっているもの、サンスクリット語のように書き言葉だけが今に伝わるなど、結果的に、文字と文字言語しか存在しないということはある。
- (5) 文字がそのような記号的役割を負う場合もある。アルファベットであれば駐車場を表す「P」、漢字ではエレベーターの「開」「閉」ボタンの文字、ガソリンや薬品を輸送するトラックの後部にパネルで表示された「危」など。
- (6) 携帯のメール入力などにおいて、たとえば「ちかてつ」と打ち込むと電車の絵文字が変換候補に出ることがあるが、これは絵文字入力のためのウィンドウ切り替え等の労力軽減を目して備わっている便宜的な操作機能と捉えるべきである。つまり、言葉を入れて変換候補に絵文字、顔文字が出てくること自体は機械的な設定に過ぎず、絵文字と言葉の対応を証するものとはいえない。
- (7) 表中の挙例では、絵文字が「そっちは」の「は」の後に入っているの、三宅の解釈が妥当であるとは思われるが、②の挙例では「飲み会」の前に絵文字がおかれている場合もあり、挿絵的使用の場合に、それほど厳密に絵文字配置箇所が決まっているわけでもないと思われ、「そっちは何時まで？」の文章に対する挿絵という解釈も可能ではあると思う。
- (8) 言葉、文を伴わず、絵文字・顔文字だけということも少なくはないようである。たとえば「(°_°) (°_°)」など。これは(目玉が飛び出るほど)とても驚いた様子を表しているが、真の仰天というよりやや「あきれ」のニュアンスもあるようである。ネット掲示板「2ch」では「(°_°) フーン / (°_ω°) ショボーン / ヒソ (°_°) ヒソ (°_°) ヒソ (°_°) ヒソ」など、多様な種類を見出すことができる。また安原[2004]によれば、たとえば怒りをあらわす「(# °_°)」は「そのままでは意図が分かりにくいことから、前後に短文を伴って使われることが多い」という(「ゴル!! (# °_°)」)。この解釈は、顔文字の説明のために文章がある、つまり文字列中における補助的存在というより顔文字主体という例だととらえていることになる。「アヒ (°_°) ズ〜〜"Q_ (°_°)」パカパカなども顔文字が主体で、いわば文字と同じ大きさの行内で再現される漫画のようなものであろう。こういった例は比較的ネット上にたやすくみつけることができるが、絵文字(顔文字)の、文字との関係で機能を計る場合にはあまり参考とならないものである、本稿では特に取り上げないこととした。
- (9) 近時はデコメ(デコレーションメール)なるものもあり、動きがあるのももちろん、背景や、文字色などの、総括的な装飾が可能である。たとえば、「OK」という2文字が色つきで、かつアピールするように明滅したり、細かく動いたりする。それでいて、これは絵文字の文字分と同じサイズであったりする。これは絵文字相当の文字、とでもいえるのだろうか。また、(笑)(泣)(汗)などの類いも、副言語・非言語補完系の絵文字相当といえると思う。
- (10) 顔文字のデザインによっては性別が捨象されていないものもある。「ㄟ ㄎ ㄎ」は巻き髪の顔文字とされるが、これなどは女性といえるだろう。

【引用文献】

稲増龍夫[2008]「「絵文字」の使われ方—メディア論的考察」(『國文学』53-5)

- 上北恭史 [2002]「携帯絵文字メールは日本語か」(『筑波フォーラム』61)
- 沖森卓也 [2012]「記号と文字」(『日本語学』31-2)
- 笹原宏之 [2001]「携帯メールの文字と表記」(早稲田大学国語学会 2001 年 11 月 10 日 資料)
- [2004]「若年層による携帯メールにおける表現とその背景」(日本文体論学会 2004 年 6 月 27 日 資料)
- 清水由美子 [2008]「絵による概念伝達 絵文字の分かりやすさと比喩の種類」(『画像ラボ』19-11)
- 堀田 穰 [2002]「絵文字って何だっ? !」(『こどもの文化』34-11)
- 三宅和子 [2012]「ケータイの絵文字」(『日本語学』31-2)
- 矢島文夫 [1976]「絵文字概論」(『言語生活』202)
- 安岡孝一 [2012]「WEB の記号・絵文字・顔文字」(『日本語学』31-2)
- [2004]「顔文字は文字なのか」(『漢字文化』)
- 安原絵里子他 [2009]「ケータイ絵文字メールによるコミュニケーション」(『モバイル 09』研究論文集)

【参考文献】

- 笹原宏之「携帯メールにおける文字表記の特徴とその影響」(『社会言語科学』5 巻 1 号 2002)
- 諏訪哲郎「東巴文字 絵文字に限りなく近い象形文字」(『しにか』8-6 1997)
- 安岡孝一「ケータイの絵文字と文字コード」(『情報管理』50-2 2007)

【付記】

本稿をなすにあたり、笹原宏之先生(早稲田大学)、小柳智一先生(聖心女子大学)、今野弘章先生(奈良女子大学)、藪崎淳子先生(甲南女子大学)に貴重なるご意見、ご教示をいただきました。ここに記し感謝申し上げます。